

医家隨想

通巻600号特集

医家藝術と私
医師としての喜びと
悲しみ／他



四〇年ぶりの絵筆

鈴木 啓之

高校生のいのちは絵を描くのが好きだつたが、医学生、医同時代生として日々を過ぐし、絵筆を持つ気も起らぬまま歳月がながれた。六十歳が近づいた今の勤務先病院の管理職に就くと、診療にくわえて病床充足率、診療報酬、医療過誤の予防など慣れない仕事が急に増えた。しかし、思つよつては「絵筆を出す」というリストレスかつての、そんなある日、田舎店のギャラリーで旧知の画家工氏に会つて「今度は絵画教室をひらきます。参加されませんか」と説いてつけた。自分でも不思議なくりでその場で即決し入会した。

たまるストレスを少しども和らげたい思いがつよく、絵を描くとこの非常の時間求めたのである。はじめて絵画教室に行った日は、嬉しくもあつ不安でもあり小学生のようであつた。その日のモチーフは、医の田刺しだある。まつ白な画用紙に鉛筆でおそるおそるはじめての一本、線を引いた。形がとれたら彩色をす。四〇年ぶりに手にした絵筆である。じいじが「イイ、イイ」とふくらめる新鮮な経験であった。

絵を描きはじめて画面に経験をした。自分の描く作品のイメージは高校生のころの絵である。たぶんあんな調子の絵になるだろつと思ひながら筆をすすめるが、いつもその頃の絵にはならない。むかしてすべて絵が全体におとなしい。

体力・気力は一〇代の「かと著しく違つて」の四〇年間の年輪も大きく影響を与えてくるのであれば、年齢とともに絵が変わるのは必然である。これから自分の絵がどう変わつてこのか楽しみでもある。

数年して、医家藝術クラブ主催の美術展があるのを知つて入会し、その年から出品させていただいた。4年前にはじめて出品したときは、会場に展示される自分の絵を見るのが恥ずかしくサツと素通りした。会場を訪れたひとは、絵の前で何秒間か立ち止まつてむかひのが大変なことなのも分かつた。

忘れられないのは、「医家藝術」平成十九年十一月号（文部省特集）の表紙絵である。その年出品した「冬の陽」と題した絵を採用していただいたことである。京都嵯峨野の落柿舎の土壁に冬の薄日が射していの一枚である。手元に届いた「医家藝術」の表紙を見て嬉しかった。表紙の枠についてかり納まつた絵は、自分の作品で

はないよつた気がした

今年の6月、はじめて医家藝術クラブ

の総会に出席し美術部長の白矢先生にお

目にかかった。「医家藝術」に載る先生の

美術展印象記は楽しい。すべての出品作

を愛情のこもったまなざしで丁寧に見て

おられる。総会の報告では、どの部も活

発に活動しているが、一方それそれ運営

上の難題をかかえているようである。こ

れまでは先輩方の「苦労も知らずに出品

させていただきたいが、これからは医

家藝術クラブの発展に、そして白矢美術

部長のもとで美術部の活動に微力ながら

もぐくさなければと思へ。

四〇年ぶりに絵筆をとつてから甲や十

数年が経つ。我が家的一角を占拠して作

つたアトリエコ一オード絵筆を走らせる

のは幸福のひとときである。最近四号の

小品だが自分なりに気にいった作品が描

けたのがうれしく、ひとりひそかに悦び

入つてゐる。サアお楽しみはこれから

だ!

医家藝術に寄せて

高木 實

日本医家藝術美術展に初参加したのは
昭和五十六年、第一十九回展である。爾
來、まことにわたって医家藝術クラブにはお世話になつて來た。私自身の記

録を調べてみると三年ほど記録の残つて
ない年があるが、殆ど毎回出品をさせて
戴いている。有難いことである。

小学校では低学年はクレヨンやクレバ
スで絵を習い始める。高学年になると水
彩画になる。しかし、先生が、一人一人
を指導するのではなく、描き上がつた児

童の絵は、教師の裁定、或いは好みもあ

るだらうが、良い絵はこれと教室の後ろ

に張り出される。そんな調子であった。

中学に入ると、間もなく大東亜戦争が始

まり、次第に戦時色濃厚となって行くな

かで、中学校の教育は学問をする場では

なく、國家の干城、つまり軍人養成の予

備校に変わつて、中学校入學時には、
200余名の同級生も、軍人を志願して
次々に学園から去つて行き、私がその学
校を卒業した昭和20年3月の卒業生は
入学時の半数以下に減つていて、中学生
時代、学校で絵を描いた記憶はなく、戰
前戦中、絵を描く楽しみを知らぬまま育
つた。

戦後、人々は自由を取り戻し、絵画は
もとより、音楽、その他の藝術に触れる
機会も多くなつた。私は外地に育ち、そ
のせいでばかりは言えないと、纖細な感
覚にやや欠ける氣味があるようだ。藝術
にはかなりの隔たりのある人間であると
言つて自覚があつた。

松本での修学は医学のみでなく、文學、
演劇、音楽など、色々な藝術文化に眼を
開く機会を与えてくれた。松本は冬は寒
いが、春、夏、秋、空氣が澄んで快適な
町である。

有名な文化人、小説家、評論家、演劇、
音楽など、當時としては招聘するのに事
事

欠かぬ頗る良い町であった。講演会、音楽会、演劇などが催されることが多く、文化的香り高い松本の町での8年間で私は多くの宝ものに恵まれたと思つている。

医師になつて、勤務医として歩むことになつた私は、以後、東京に住むことになり、長年、産婦人科で仕事をして来た。今の時代は、勤務が激しい爲に新しく医師になる者には、産婦人科は嫌われる科になつてしまつたが、勤務が忙しく、仕事を以外に何も出来ない日々を過ごしてきた。

漸く絵を描いてみよつと始めた年は、年齢五十歳になつて、長い離伏の年月であつたが、絵が描ける現在は至福の時間と書いても良い位である。

以前から私は趣味を持たない、無味乾燥な人間と見られていたらしく、生来無口で通つてきただ、自分のことを殊更目慢する」とは嫌いである。

『きみは何が樂しくて生きてこられるのか

ね。趣味とかは無いのかね。』面と向かつて、そつと無礼な言を吐いた人物もいた。礼節を弁えない大人が寵り通る世の中、嘆かわしい。

私は絵を描くよみになつて、物事の表面を写し取るだけではなく、誰もがつい見過ごしてしまつものを見つけて、描ければ良いと思つよつになつた。

風景画にしても、絵が風景を語るだけでなく、作者と絵の中の風景との対話が漂つて来る。そのよつな作品が出来れば良つと感想い。

六田町の迷懐

医界誌(仮名)

この度、私こと医界誌は六田町を数え、る迄に至つた。慶賀に耐えないとだ。わが国が長寿世界一だからと、眞似をする事はないのだが、クリフ誌としては長寿の部類に入るであらば、

これまで実に多彩な才人やら文人墨客やらが登場しては去つて、いつだ去る前に去つて、いたひともいたよつたが、その歴史のなかで、何時の頃からであるか、文部省でもないのに田中秀昭といつ会員が、臍面もなくヘボだかチャボだか判らないよつな隨想を投稿し始めたのである。

少誌としては笑止十万と書いて放つておくわけにもつかず、詮方なく社会福祉の精神から投稿してきた文を掲載したのが間違いのも、味を止めた氏は毎月のよつて何年にもわたつてくだらない文をわが編集部に送り続けたのである。

氏は元を紹すと、当クラブの旧奇術部に所属して、いたらしい。故緒方友三郎先生の発案で始つた全国医家奇術フェスティバルが、当時は毎年行われていたが、その頃の部員たつたそつである。何年もの間続いたこの会も田奇術部共々いつか歴史の彼方に消えて、いつた。

それ以後、氏は奇術から離れ、代わりに隨想という間違つた領域に入り込んだのである。今にして思へば、氏も早々に往時の奇術部と運命をともにして欲しかった。

されば、何年もの間、小説の編集子が毎冊のよひに「極まれり」とはなかつたに違ひない。幸いにさうして数年来バタツとばかりの投稿が途絶えて、どうつかじのまま大それたことを再び始めるゆづないじはしないで欲しき。

六百回と二つ記念の一ページを刻むことができ、私と医家芸術誌は心からこのことを誇りしく思つて、いのうじうのだから。

(田中秀昭)

本命馬

星野達夫

病棟に通じるエレベーターはなかなか来なかつた。私は3時に病棟で指導医と一緒に受け持ち患者の長男に会つた。丁

なつて、壁の時計の針は3時15分前をさして、した。A子ちゃんの長兄は一流企業の社員で、パリに駐在してくるのと、だつた。年輩の看護婦は以前同じ日が不安と懸念の連続だつたが、若くて張り切つて、いた。医者になつて最初に担当した患者がこの患者で、66歳の男性、病名は末期の肺がんだった。

彼には若い娘さんがいて、毎日のよつに病院にやつて来て、父親の看病をして、いた。知的で笑顔の明るい人で、私は病室に行くのが楽しみだった。同じ病棟に配属された若い医者も皆彼女のファンになつた。我々は親しみを込めて、彼女を「A子ちゃん」と呼んでいた。時々着のHプロ

ン姿がまたなんともいえず素敵で、若い医師は早速お皿の職員食堂で、「今日のA子ちゃん見た?」「Hプロ、祭だね?」見た見た!「いいね」とつわさをしあつた。同僚はみな私をつらやましがつた。私は「いいね」とつわさをしあつた。

夏の暑さが続いたある日、患者が急変した。血圧が下がつて、いたのである。今にして思へば、悪疫質と食欲低下を背景に熱中症を併発し、多臓器不全が起つかけっていたのである。私と指導医が呼ばれ、更に何人かのドクターが加勢に駆けつけた。病室の隅でA子ちゃんが泣いて

いた。しばらくして連絡を受けた家族が次々と到着した。来る人も来る人も立派な人たちで、家柄のよさを想像させた。それから何日もかかったが患者は次第に回復し危機を乗り越えることができた。

患者の状態が思ったより悪いので、指導医と私は長男に帰国してもらい病状の説明をすることにした。それがこれから予定されてくる面談だった。

よみやくやつてきたエレベーターから病棟階で降りた私はまっすぐに病室に向かつた。腕時計を見るところ2分前だつた。ネクタイにぎょっと手をやつてから私はドアをノックした。

病室の中にはA子ちゃんと、ひとりの男性がいて私を迎えた。患者の長男である。想像していたよりも若い感じだが立派な紳士だった。

「お兄様ですか」と私は聞いた。返つてきた。「これは衝撃的だった」

「いいえ、主人です。兄は申し訳ありませんが30分ほど遅れます」

私は一瞬軽いめまいを覚えた。しかし心の動搖を表情に表すまいと懸命に自分に言い聞かせた。不測の事態が起つても泰然としていてこそ本物の名医であると考えたからである。

開業医のヒストリー

小川昭子

毎年春になると行事が多い。太字の謝恩会から始まり、同窓会や女医会の終年先輩方の叙勲、教室の記念祝賀会、退官

教授の謝恩会等、予定表にべつたりと記入されていたが、特に感銘深かつたのは

東邦大学創立六十周年の祝賀会だった。盛大な壯麗な会で、関係者の御努力がしのばれ、感謝の気持ちで、この大学を卒業したといふ幸せで、胸がいっぱいだった。

母校が六十周年を迎えたといつ事じ月日の流れの早さにただただ驚きの日をみはると同時に、卒業して三十五年もと

思つと青春時代がしのばれ、なつかしさで胸が痛くなる思いがする。過日、藤田先生にお目にかかる時、次号で「鶴風」が最後であると伺い、かつて編集させて頂いた関係で、これも誠に淋しい事だと切実に感じ、ペンを執らせて頂いた。さて私は、二十五年に卒業してから数年小児科の臨床を学ぶ傍ら、本郷のグルノで研究を続け学位を頂いた。ほほ論文が出来上がった三十二年から、狛江の片田舎で土地の方たちの強い要望で姉と開業した。

思えば早や三十年近くになる。当時の幼稚児達が、今自分の子供を連れて来院し一族四代を診ている例も少なくない。その間つれしい事、苦しい事、悲しい事等色々な思いを経験したが、今回の鶴風の最終号といつ事で、面白い事、特に忘れられない事を記し、同窓の先生方に一緒に笑つて頂きたいと思った。

開業した当時の口曜日、中年の男が窓に「ひこ」「先生入れ歯を見て下せ」とい

つたので、母が「家は歯科はしていないですよ」といつたが、後で「先生がいれば絶て下さい」の意味だつたそつで、未だに笑い話になつてゐる。また、私の小さな医院は、患者の数だけは多く、患者に殺される……と時々愚痴をいつてしまつたが、関東中央病院からお一人の先生にお手伝いに来て頂いていた。また、夏に姉一族が避暑に行く時は、私一人では患者を捌ききれないで、当時小児科専攻でいらした五島先生にもお願いし、一人で楽しく外来をした事も数回あり、なつかしく思い出される。

その中の一人の先生がとても辛辣な事をおつしやる方だった。或る時、育児相談に来院した母親が「この子は牛乳の方が良いでしょか、母乳の方が良いでしょか」と聞いたといふ。「この子は牛の子なら牛乳の方が良いでしょ」と返事をされ、その母親は目を白黒させたが、私は思わず吹き出してしまつた。今も講義でその話をすると、流石に生まれたちも

爆笑し、しばりへ止まらなくなるが、なんと分かりやすい説明かと今更感服している。

また、田舎の患者が「僕胃が痛いから胃を取つた方が良いかね」といつたところ、「あんた頭が痛いからとつてしまつた人がありますか」とその先生がいわれたので、また、部屋中爆笑したが、過日、その先生も急逝してしまわれた（祈、冥福）。

或る口全額品割創の男性が来院、ニッヘルで簡単な傷を止める程度はよくやつていたが、その創が針と糸ですべきだという事が私にも分かつた。外科の義兄が不在だったため、思い切つて私がやる事にした。麻酔する手も小刻みにふるえたが、自分に「落ち着いて落ち着いて」と言いながら受針器で縫つたところ、麻酔の深さで、針の深さが食い違つていたらしく「痛、痛」とわめくので、「大の男のくせにがまんしなさい」と叱づながり泣きたいよつた吹き出したこめつた気持

ちをやつといひて終わつた。翌日義兄に贈りさんとひも上手に縫えていたよと褒めてもう嬉しかつたが、昨日の心境を話し、一回涙を流して笑つてしまつた。

最近の事、二歳の患者が感冒性消化不良で来院した。母親の訴えでは激しい水様便との事だったが、子供が「先生おしつこが前と後と一つ出ちゃつた」と言つたので、あまりにも上手な表現に、薬局も、看護師も、また笑いが止まらなくなつてしまつた。

頭脳と肉体と両方すりへらす開業医、田毎に複雑化する保険請求に、ともすれば愚痴をいつたり、うそざりしたりするが、ここに記した話（氷山の一角）のように楽しい事、面白に事がほほびで朝になると今日はどうんな一日になるだらうと思い、夜終わつて後付けをする時事故もなく大勢の人々に感謝され、喜ばれたという満足感で、また、明日へのアイトが湧いてくる、ところ毎日を過りし

てこる。

昭和四十一年 五島先生の御推挙で
理事をやらせていただけてから、本当に
多くの先生方に接する」ことが出来
た。やさしい方、頼もしい方、悲しいと
お慰めで下さった方等、心温まる思い出
が、回念生つて何とすばらしこのだ
らうとしみじみ思つ。

鶴風会が終わつても、「鶴風」がなくな
つても、会員の心は昔と少しも変わらぬ
はない。同好会でもよし、何らかの形で
今後も御一緒に樂しい時を持ちた」とつ
くづく思つ。最後に藤田先生に、立派な
「鶴風」の編集に最後まで全力投球して
下さり、心から感謝の意をこの誌面を借
りて表したいと思つ。御母堂様が「とき
の編集をしてこられた」とこの素敵なお話
を思い浮かべながら。

東邦大学医学部同窓会誌「鶴風」四
十七号（昭和六十年九月）に掲載した
ものから転載しました。

高橋有恒先生のこと

平野春雄

「医家藝術と私の関係」は、はつきりし
ないが、高橋有恒先生が、或は東京都医
師会で、学校医会や都医二コースに關係
が出来て以来のことかと思われぬ。

豊島区薬鷹の拙宅の近くに庭の広い邸
宅で、「医師、高橋有恒」の門札のかかつ
てしる家があつた。医師と門札があるが、
高橋先生は、医学博士である。某日、高
橋先生が自著の小説を数冊持参して拙宅
でお話を承り、またその後、東京都医師
会の広報部に關係して後、「医家藝術」に
入会となつた様に思ひ。

都医では広報担当理事の神津康雄委員
長のもとで、三越デパート七階を借り切
つて、「健康祭り」等の全国的広報事業に
参加したり、都医二コースの編集委員長
として従事した。

又渋谷区医師会の「瀬正義先生が一緒

で彼は実に筆まで医師会及び学校関係
の会報や本誌にもよく寄稿してた。学
校医と謂れば、練馬区の沼口満津男先生
は医家藝術の古株であり、学校医全国大
会でお会いすることもあつたが、先生は
小生と同年のベトランである。

次に高橋有恒先生のことと述べておき
たい。先生は豊島区医師会の医道審議委
員長をつとめられたが、心臓を痛められ、
車椅子で地蔵通りを散策の姿にお会いし
たこともあるが、某日、早朝、家族から
の急報で小生が往診したが、すぐに「く
なりた」。葬儀は自宅で挙行されたが会
葬者は門前にあふれた。出棺の時に俄か
に沛然たる雨が降り出した。

高橋先生は東北の温泉旅館の御費可で
あるとき、実家の客席を拝見させていた
だいた。トソネルを抜けると雪だつた。
…の川端康成の宿で、「雪国」を書いた
部屋を見せてもらつた。駒子が通つた六
畳位の「じんまつした部屋」であつた。

医家藝術に至るまで

榎 本 貴 夫

先日、地元のスーパーに賣い物にでかけ、少しがっかりする経験をした。催し物で間に幼稚園児の絵（恐らくは父母の顔である）が数多く展示されており、その中に3歳児の絵もあった。多少の製作のアンバランスは仕方ないものとして、絵はしっかり描かれて面白かった。が、多少がっかりしたのである。

と、いつのまにに至るまで、私の密かな自慢（二歳の時に家族（恐らくはやはり母）の絵であったのである。しかしこれは何か特別自慢すべきことではなかった訳である。しかし絵に対する興味は失われず小学4年のとき働く人をテーマに描いたものが図工の選任教師（内藤先生）のおかげで都か区か定かではないが出品させられたことが有り、忘れかけていた心に再び灯がともった。

中学に入ると油彩の基本手技を授業で習ってきた高校生の兄が教えてくれた。以後、水彩絵具を厚く塗る習癖が身についた。高等学校では授業は水彩ではありましたが油彩への思いは断ち切りがたく厚塗りをよしとしてきたが、絵画専門の教師（高島先生）の理解もあり束缚も受けずに楽しむことが出来た。



高校一年の時、たったと思つが読売新聞社共催で上野の西洋美術館でルオールの企画展が催され、読売新聞購読者に招待券のサービスがあり応募したところ抽選に当たり、恐らくは生まれて初めて授業をサボり美術館を訪れた。その時の心を搖

さぶる衝撃は抑えよつたものであつた。その時のイメージをノートの表紙に描いている（写真⑤）。

私が師事した脳神経外科学、故牧豊教授が定年を迎えて退官した際に最終講義終了時の肖像画を描いて差し上げた。そんなことがきっかけになつたのが定かでないが、牧名譽教授が筑波大学の医学を家庭教師にして六十の手習いを始めたのである。先生は何事につけ仕事が早いので程なく、いのくな美術展（千葉大学医学部の美術同好会）に出品を始めた。そしてその先生の紹介があつて私も入会させていただいたのであった。

回を重ねるうちに故大村光先生の御推挙があり日本医芸術クラブに入会させて頂いたのでした。その年はボンベイ現

ムンバイ) 湾を出品し表紙にも採用していただいた思い出があります。以後、描法に共感をてる大村先生、斎藤宗寿先生などに教えをいただき、また長尾先生にも理説をお聞きしながら今日までいたつて、いるのであります。

今後は更に先生方の教えを肝に銘じ、つ白矢先生らとともに、自らの表現を追求することによって、本会の更なる発展を図りたいと願つて、いる次第であるのです。

1970年 そして今へ

秋葉琢磨

1970年(昭和45年)は私達にとって最も大変な時代であった。父のペニシリソック死に始まつた悲壮そのものである。東京から宇都宮へそして千葉県八千代市へ。四面楚歌の反対の輪に居た昭和43年、新設園地では医療機関開業の連携、麻酔科標榜医の資格で外科系の訴え県からも人を派遣して早く、早くと

急かした。そして開業に踏み切つた。開業の建設中から手術患者(子宮外妊娠)分娩希望者がつめかけた。それぞれの前医に患者とともに、行つて一人で手術した。代金は0である。大変であつたが命を救つた。

大学医局時代に麻酔科標榜医を取得して、あらゆる資格を取得して開業したことがあり、敵や悪口(悪評)を消す基礎となり、近隣の医師達の手助けとなつて、いた。そして景気の良いときには遠くはフィンランド、ボリビヤ、フィリピン、ブラジル、ペルなど外人の出稼ぎ女性が多く来院した。開業35年間は本当に忙しくよく働いた。八千代市役所産業医、千葉産業保健推進センター相談員(労働省)各地域工場への講演、老人会での講演など昼夜み時間を利用した。

毎日の外来診察、分娩、手術、近医と

た。大切にもされた。今でも麻酔医は可なり不足している。もう一度分娩を取り扱つては如何かと進言されている。

過日近医のオンラインで分娩を取り扱つたが初産で3500gの男児で76歳の私は疲れを感じマッサージを依頼した。ともかく若い時は本当によく働いた。

行動範囲も広かつた。趣味でもゴルフ、俳句は50年の年期がある。日本医芸美術クラブの会員でもある。俳句でクラブ会誌に投稿している。

俳句への関わりは、そもそも「アララギ」の雑誌の創刊から今まで母方の祖父の実家で発刊された。(明治41年10月13日発行 ¥13銭)

今東京根岸にある『子規庵』は、入場料500円。山武杉で東京大空襲後、蕨檜堂の寄付材木で建立されたものであり、故寒川鼠骨先生の『子規弟子最後の直下生』子規庵題記のページ40に詳細に記載されて、いる。

今では俳句、書道、美術でお世話をな

つている。銀座に出かけないとが多くなつてゐるが楽しみでもある。
千葉県美術会会員、近代水墨会会員である。

余命少なき今

青山 六 弥

去る一月一日 水泳仲間(二二二二)へから新年会を兼ね90歳の誕生祝をして戴いた。車での送迎、畠では胡坐をかけない小生のため、低い立派な椅子を用意して下さり、胸に大きなリボンを付けられるなど、面貌い氣がした。「元気で長生きの手本」などと言われ、汗顔の至り、かくかく悪い所が多いと話しても、この年で水泳可能だから大した事はないと思われてゐる。

実は一月はじめ頃から、夜間、両手(特に左)の手指の痛みとシビレがあり、日中は痛みがなくなるが、屈曲がよく出来ず、衣類の着脱、皿洗い、瓶の蓋開け、

手を掴み、鍔表の悪い道をガタガタ音を立てて歩いた事。脊椎が前屈位であるため手関節に負担が強くかかり、手根管の腱鞘を痛めたものと思われる。幸い右手は中指を除き機能障害は軽く車の運転は可能、月初オール行きは週一回としたが、一ヶ月前から回行けるようになつた。手指機能のためによくハピリになつてゐるが、しかし今、左中指が少し腫れ、薬指、小指と共に屈伸不良が続いている。手術は外来で十分程で済むと語つが、予後は必ずしも良好でないよ。ステロイド注射、レーザー照射はあまり奏効せず、湿布がよいので続けてゐる。

このほかに脊椎後湾症、左肩、右膝関節炎、慢性胃炎、前立腺肥大、右耳難聴等があり、歯肉炎などで食慾不振のため体重が十年前より約8kg程少なく、45

kgを上回してゐる。この状態であと何年診、「手根管症候群」と診断された。原因は散歩に手押車を用い、多くは左手で把んで浜までは着着の海女の時雨かな、瓢水海に入ればすぐ濡れるのだから、雨が降つて着を着るのは無駄ではないかと考えるのは間違いだ。わが身をかばい着を着るのはたしなみで快しく美しい。ここでは浜は死を暗示するよつて思われる。どうせ人間はいずれ死ぬ。よく生きる努力なく空してではないかと考えるのは浅はかである。夕力をへつてなすべき事をしないのは怠慢である。最後の最後まで生きるために力をつくすのが美しい(外山滋比古著「マイナスのプラス」より)。海に入る海女達は厚着だ。体温低下を防ぐためである(先日ドコをみて)。多田富雄博士は世界免疫学会会長をされた頃学。一〇〇一年、脳梗塞で三日間昏睡状態の後覚醒したが、重度の右片麻痺、言語障害等が続きハピリを受けたが効果が少なく、車椅子の生活が続

六年後には手術不能までに大きくなつた前立腺癌が発見され、リニアック放射線照射を三十五回受け、副作用で癌が腫脹尿閉となり、留置カテーテルをした。

一手に介護に専念された奥様（医師）が股関節の置換手術を受けるため一ヶ月入院。先生は実妹の経営で稼いでいる特老ホームに入院された事もある（100八年、期間不詳）。この間、読売新聞夕刊に一年間エッセイを投稿された。左手指でキーボードを叩いての原稿で人の数倍も

時間がかかり、手も肩も痛くなり遂には左鎖骨骨折を起した（一九年十月末）。立ち上がるのに左腕に強い力がかかるからだ。

先生は能に造詣が深く、多くの新作能を発表され、不自由な身で京都まで舞台の検分に出てかけられたりもされた。一〇〇一年五月のあとかきには「死の足音を聞きながら書いた」とある。それから間もなく四月二十一日逝去。享年七十六歳。

人は重病に襲われると多くは落胆します。

鬪病の意欲を失づ、経過がよくとも創作活動をする人は極めて稀である。壮絶な

先生の生き様には鬼気迫るものがあり感服に堪えない。先生の著書「落葉雑語」

とばのかたみ」には高齢者の医療問題、食の賞味期限、若き研究者へのメッセヤードなど多彩（一）読め。

一方、わが身を省み、小事に拘泥しきる自分が恥ずかしいと思つた。

（美術・写真・洋楽・文芸）

不安で不安で

楠 登

私は学生の頃、六十年程前、町の画塾で絵を描いていました。夜になると悪友達と一緒に似顔絵かきで稼いでいました。たしか、新橋？あたりでしたか、目の前の山手線の暗闇を、物悲しい聲曲を残して電車は消えて行きました。繁華街の裏は裸電球の街燈が一本立っています。そこで立小便をしていました。

今で言つ高校生ぐらいだったでしょうが、仲間は分け前を貰つて童謡を歌いながらスキップで去つて行きました。それ以来、会つていません。

彼は妙に印象に残る奴でした。不安で不安でしようがない、不安で不安でしようがない」とよく言つていました。不安で不安でしようがない、それが彼の口癖でした。不安で不安でしようがない、何が不安なのかよく分かりませんでした。

おなじく彼自身もよく説明出来なかつた
のかも知れません。

私は医学生でした。故郷には親父もい
ました。仕送りをして貰つていました。
しかし少々足りませんでした（親父には
申し訳ない）。私も最近畠をとつて墓地を
買いました。そのつい終の栖ではないが、
女房と一緒に六歳くらいには用意しなけれ
ばならぬ歳になりました。兄貴がいるか
ら御先祖様の墓には入れない。お前はな
適当にやつとけ」と言つたかどうか知り
ませんが、私としては「勝手にシヤガレ」
とかなんとか、威張つてみせる他ないの
です。

そういうわけで、とにかく御先祖様が
いるのです。立派！な墓でもあるだけで
安心です（御先祖様に対する事をどう
いの書きたり田が）。

ボツと田の馬の骨でもあるまじと
散々お説教を……いやいや勝手な熱を吹
いているのも御先祖様のお陰だとつ
づく思つてます。その昔生時代

アフレグールとか封建的何とかかんとか
いろいろハヤリました。そして首尾よく
家族制度は崩壊してしまいました。御同
慶の至りです。

あの不安で不安でしょうがないと云つ
た彼もどうしてこるのでしょうか。無事
に就職出来たでしょつか。結婚したでし
ょうか。子供は何人位いるのでしょつか。
安定した老後で奥さんと一緒に教育問題
とか介護問題とか、あるいは子供達の将
來の事等いろいろ語り合つてしているのでし
ょうか。あるいはまた、ピカソの「貧し
い食事」など見るながら人生を語つている
のでしょうか。

「ディスボーザブル・ドク
ターは捨てられたか

隅 坂 修 身

医療の現場で「ディスボーザブル (dis-
posable) 製品」が、再使用しないで使つ捨
てる」としてみて、感染予防や洗浄、滅
菌などの手間と経費を省くことが出来て、
今では、無くてはならない物となつてい
る。バブルの頃は、世間一般に使い捨て
が蔓延し、故障した製品は修理するより、
新品を買った方が安く、性能の良い物が
手に入り、消費は美德とあらゆる物が
捨てられていた。ちょうどその頃の、厚
生省（現在は厚生労働省）直轄の国立病
院の医者に対しても、このよつた考へが
浸透して、いたに違ひない。国立病院の整
形外科勤務医として、既に、8年間働い
ていた私は、大学の同門会誌（醫學会誌
第4号、1988年発行）にて、「ディスボ
ーザブル・ドクターと呼ばれないために」
と題して書いています。その内容の一部を
抜き出し、加筆してみた。

マイクロサーボ・ドクターは、長時間にわ
たつての顕微鏡手術を行うので、体力が
要求され、田も酷使することにもなり、
若じ人に向く仕事を考える。病院の医者
不足もそれそろくなり、医学部を卒業

しても職はなことつよつな時代も予想され始めたから、若て医者も漁れてくるとの風評を証明するよりて、医学部入学の募集定員数は減少を示していた。新人類に言わせると、我々の年齢の者を化石と呼ぶらしい。そのつか、墓標、墓石、先祖様か？

この頃、Y病院の整形外科医は一人であつたが、年々忙しくなつて、外来、入院患者の診察、看護学校の講義、予定緊急手術と一人重役（十役）であつた。働けど、働けど、猶、我がくらしは樂にならひつ、じつと手（hard surgeon）を

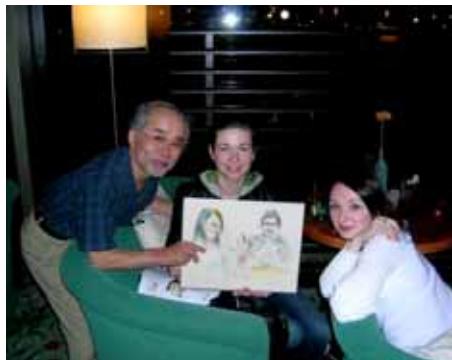
新参者ですが父と同様よろしくお願い申しあげます。下手の横好きなので、立派な才能はないので皆をほひつていてけるか心配です。
(美術・写真・洋楽・文芸)

吉元勝彦

じよげんかつひこ

診る、と啄木をもじつてゐる。整形外科の入院証明や障害診断書等の書類は、書いても書いても、泉の様に湧いてくる。これら書類にて、本年のベスト・ストレッサー賞を贈りた。仕事に疲労困

整形外科の入院証明や障害診断書等の書類は、書いても書いても、泉の様に湧いてくる。これら書類にて、本年のベスト・ストレッサー賞を贈りた。仕事に疲労困



ポーランド旅行中に出会ったロシア娘

懲してて、病院統廃合で余つた医者が助けに来てくれるまで体力が持つか、自信が無くなれば、逃げ出すしかあるまい。スモールランプを消し忘れられて駐車している、車の運命が思つて浮かぶ。拒職症で倒れれば、それは、あなたの健康管理が悪いからですよと片付けられそつた、せめて、医療秘書でもほし。企業では、重要なものの順位として、人物、金、情報、時間、チャンスと言われているが、国立病院では（厚生省）言つた方がいいかも知れないが、人が軽視されているよりも思える。病院システムの硬直化は、職場環境の改善に積極的に働きかけようとする職員の意欲の低下、即ち、無気力、無関心、情緒的混乱（精神科領域では、学習された無力感と言つらし）につながると思われると、書いていいる。

今働いているのをティスボにして、毎年、若い医者は誕生してくるではないか補充はできるど、心配はこらなにはずだつたが、……社会実験が終わり、予測が見事に外れたことが明らかとなつてきた。今からでも遅くはない、いや、軌道修正しても、成果が出るのはず一つと先となるのが困りせり。

定年を9年残して12年前、手縫手管で「手の外科」を口説いて、手に手を取つてY國立病院を駆け落ちした。フリーの整形外科医としてのスタートは、毒つきディスボ・ドクターの解毒滅菌再利用なので、人件費はタダ同然。クリニック開設に、償単位のお金を掛ける人の田には初期投資は限りなくゼロに近い。嬉しいことは、例え、やめても借金が残らない安心感に、富仕えと違い、人間らしく自分の時間が自由に出来ることであった。

グラジアノと朝青龍

小川再治

人間に未成熟で感情が不安定な朝青龍は、機嫌の良い時は人の良い温かさを示し、案外多くのファンに愛されていた。引退力士の断髪式では、一弓一弓にその力士の肩を撫でていたのを思い出す。米国で大分前にボクシングのチャンピオンになり、人々に愛されたロッキー・グラジアノは、朝青龍から「温か味」も除いてしまった様な腕力の強い不良少年だった。しかし朝青龍の様に沈没することはなく、模範的な市民になった。

両者の違いはどこにあつたのか。私は心理学でいう欲求不満の「昇華」の成功・失敗が大きな原因だったと思つ。『昇華』とは悪を犯すエネルギーをプラスの方に向に発散することを指す。例えは暴力を振るえばスカッとする人が家をぶちこわしても、その家が撤去されるものであれば、彼は社会貢献したことにならぬ。

不良少年グラジアノは超人的腕力を使つて、弱い者をいじめて喜んでいたが、ある時ボクシングを憶えた。以来彼はその腕力をリングの中だけで使い、リングを降りたら優しい人になる努力を始め、見事に成功した。日常は非常に謙虚で優しいが、リングでは野獸と化し、相手を殴りとばす。相手はいい迷惑でノック・アウトされる。その結果ほめられるのだから、こたえられない程嬉しい。遂に彼

グラジアノと少なからず似てゐる朝青龍は「腕力」と「優しさ」の使い分けが苦手だった。彼は言った。「僕は土俵に上がる時、相手を殺す氣力でぶつかる。そうしなければ怪我をしてしまつ」と。しかに格闘技には、この種の氣力が必要であろう。しかし品格?ある横綱は相手に謙虚でなければならない。土俵で相手を倒したら、すぐ野獸性は捨て、紳士にもどり、時には相手を助け起しす優しさが欲しかつた。

私は少年時代、双葉山が誤つて相手の足を傷つけた時、その力士がおんぶされていくのを、心配そうに見つめていたという話を聞いた。所が朝青龍は、倒した相手を土俵外に突き落としたり、大仰なガツツボーズをしたりした。この様な場合、もう少し優しさを示したら、天敵だった内館牧子さんに叱られるとはなかつた。惜しまれてならない。

「プライドが生じて来て、穏やかな性格になり、社会の名士と謳われた。」

グラジアノと少なからず似てゐる朝青龍は「腕力」と「優しさ」の使い分けが苦手だった。彼は言った。「僕は土俵に上がる時、相手を殺す氣力でぶつかる。そうしなければ怪我をしてしまつ」と。しかに格闘技には、この種の氣力が必要であろう。しかし品格?ある横綱は相手に謙虚でなければならない。土俵で相手を倒したら、すぐ野獸性は捨て、紳士にもどり、時には相手を助け起しす優しさが欲しかつた。

私は少年時代、双葉山が誤つて相手の足を傷つけた時、その力士がおんぶされていくのを、心配そうに見つめていたという話を聞いた。所が朝青龍は、倒した相手を土俵外に突き落としたり、大仰なガツツボーズをしたりした。この様な場合、もう少し優しさを示したら、天敵だった内館牧子さんに叱られるとはなかつた。惜しまれてならない。